

4. 体験学習プログラム ～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～

ボランティア・NPO 活動センターは、学生が長期休暇を利用して国内の地域や治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、地域貢献、福祉、環境関連の現地 NPO・NGO などとの交流を通して、その課題解決の取り組みなどを学ぶ「体験学習プログラム」を、夏季と春季の休暇期間に実施しています。

2021年度は、新型コロナウイルス感染症の影響は続きましたが、感染対策に留意しながら対面で出来る時は対面で活動しようという機運が高まった1年でした。海外への渡航は隔離期間等の問題もあり、今年度の実施は見送り、夏季・春季ともに国内で出来る形にて実施しました。夏季はカンボジアをテーマにオンラインで現地と繋いで実施しました。春季はアフガニスタンの現状に対する講演と、NGO 団体を本学にお招きして実際の活動を体感してもらう内容にて実施しました。両プログラムとも海外への渡航が制限される中、国際問題への関心を失わない事を目的に実施しました。またウクライナ情勢の急変を受け、緊急企画としてウクライナの現状について考える企画を年度末に開催しました。

国内体験学習プログラムは、オンラインや対面を組み合わせた2つのプログラムを実施しました。1つは、例年実施してきた「福島スタディツアー」です。当初は現地に実際に訪問するプログラムとオンラインで福島と繋ぐプログラムの両プログラムを連動して実施予定でしたが、感染拡大の影響で、オンラインのみの開催となりました。もう一つのプログラムとして、滋賀県近江八幡市を日帰り計2日間訪問し、左義長まつりをテーマに開催しました。新型コロナウイルス感染症が地域に及ぼした影響や伝統行事・文化の継承について考える企画を実施しました。

事業名	オンライン海外体験学習プログラム ～世界の現状を知る第一歩！～ カンボジアオンラインスタディツアー
実施日	プログラム当日：2021年9月6日（月）13時30分～16時30分 事後学習会：2021年9月9日（木）9時15分～10時45分
実施形態	オンライン（Zoom）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	本学学生25名

1. 経緯・目的

例年海外に渡航してプログラムを実施していましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2020年度に引き続き、2021年度も実際に海外に行くことは出来ませんでした。このような状況の中、国内でも学びの機会を確保するため、Zoom を利用し、オンライン海外スタディツアーを実施しました。

今回は、以前より学生の興味関心の高い地域であったカンボジアをテーマに、認定 NPO 法人テラ・ルネッサンスにご協力いただき、開催しました。中

でもカンボジアに深刻な問題をもたらす地雷問題に焦点をあてて、現地との中継を交えながら、カンボジアの歴史や文化にも触れる事が出来るプログラムを実施しました。

当初は、参加者は学内教室に集合して現地と繋ぐ対面での実施を予定していましたが、緊急事態宣言発令に伴い、各自自宅等から繋ぐ完全オンライン形式での実施となりました。

2. 概要

①事前学習

プログラム当日をより有意義な時間にするため、参加者には事前にワークシートを配布し、事前学習として提出を必須としました。

少しでもスタツアの雰囲気を感じてもらおうべく『旅のしおり』と題した事前学習の案内を配り、参加に至った想いや、カンボジアの歴史・地雷問題等に関する事を、参考文献をもとにワークシートにまとめてもらいました。夏休み期間中である事を加味し、提出はデータ形式でメールにて送付してもらうようにしました。

②プログラム当日

協力団体：認定NPO 法人テラ・ルネッサンス

(以下テラルネ)

テーマ：地雷問題をもとにカンボジアを知る

内容：テラルネの栗田佳典氏を本学にお招きし、カンボジア現地法人との中継を交えながらカンボジアの歴史や文化、地雷が引き起こす問題などをご紹介いただきました。現地の詳細な状況については現地法人の江角泰氏よりご説明いただきました。また地雷被害者のイェン・ハン氏と娘であるヤン・パンニー氏からお話を聞く事ができ、地雷被害を受けた後の影響や、現状のカンボジアの教育事情についてもお話を聞く事ができました。参加者からもたくさんの質問がなされました。また終了後、Google フォームにて感想や質問を送信してもらい、事後学習会へのステップとしました。



③事後学習会

事後学習会にも栗田氏をお招きし、参加者の疑問にお答えいただきました。この日はグループディスカッションを通じて、参加者同士で想いや疑問の共有、またこういった社会問題解決のために何が出来るのかをジャムボードを用いて話し合いました。適宜栗田氏に解説をお願いしながら、今後繋がる学習会になるように努めました。



3. 受講者の声・得られた効果など

- ・日本にいなながらも私ができることはたくさんあると知りました。同じことを繰り返さないように私がお今日学んだことをたくさんの方のところで広めていきたいです。そして、もっともっと学んでいこうと思います。
- ・ホームページやネットでも様々な情報を得られたが、やはり生の声を聞くのは大事だと思った。テラ・ルネッサンスの方々の話からもとても刺激を受けた。
- ・事前学習では、自分にはない視点からカンボジアについて理解を深めることができ、さらに興味関心をもちました。当日は現地の方やテラ・ルネッサンスの方との交流でより大きな刺激をいただきました。
- ・実際に現地の方とコミュニケーションをはかる機会が与えられたことが本当に貴重でとても良かったです。学習をする中で自分自身の考えを深め、さらに意見を交換することで、いろんな視点から問題について考えることが出来たと思います。
- ・地雷だけでなく、世界の国々が抱えている問題を知り、実際に現地に行くことが出来なくても調べたり興味を持つことで自分の知識にもなり、その知識を周りの人々に広めていくことが私たちに出来ることであると考えました。
- ・テラ・ルネッサンス 栗田さんのカンボジアについての説明で、料理などの写真がいくつかあがっていて、とても美味しそうで魅力を感じました。実際に車に乗って移動をしている時の動画を見て



いて、自分がカンボジアに足を運んだような感覚を味わえて楽しかったです。



4. コーディネーター所感

2019年度までは実際に海外に訪問していたこの事業ですが、今年度もオンラインを駆使した形での開催となりました。当初参加者は学内に集合し、対面で出来ることは対面で実施したいと考えておりましたが、緊急事態宣言の発令に伴い、完全オンライン形式での開催となりました。そのような状況下ではありましたが、ブレイクアウトセッションやジャムボードといったオンラインツールを有効に使い、出来るだけ対面開催時と変わらないように運営する事を意識しました。

また今回の企画は当初20名定員としていましたが、実際は30名を超える参加希望がありました。やはり学生にとって国際問題を取り扱う企画は関心が高いと感じました。

プログラムについて、地雷被害者の方から直接お話を聞く事が出来たのは貴重な機会となりました。地雷について、聞いた事はあっても身近な問題では

ない日本で、その当事者や支援の最前線にいる方々のお話は参加者にとって響くものがあったようでした。また、通訳が間に入る事による時間差等、プログラムの趣旨とは異なる部分での気付きも参加者にはあったようで、編集されていないありのままの様子を知る事ができたのは非常にいい機会ではないかと思いました。また、地雷に関する質問もさることながら、参加者から現地の大学生の様子についてたくさん質問があった事に驚きました。留学生との交流がこのような状況で減り、同世代間での交流も減っているのかなと感じました。

今後いつまでこのような状況が続くのか分かりませんが、国際問題に接点を持つことが出来るプログラムを次年度以降も企画していきたいと思います。また、このようなプログラムの運営は、継続して活動を続けている NGO 団体の協力なくしては成り立ちません。今後も NGO 団体と良好な関係性を築き、よりよいプログラムを企画していきたいと思います。

〈報告者：吉田 裕貴

（深草キャンパス コーディネーター）〉



○海外体験学習プログラム／アフガニスタン【春季】

■参加学生

今井 杏（経済学部 国際経済学科 4年次生）	森本 大輔（経済学部 国際経済学科 4年次生）
埜 風（文学部 歴史学科 3年次生）	堀井 涼花（農学部 食料農業システム学科 2年次生）
野村 峻舜（文学部 真宗学科 1年次生）	山本 蛭太（文学部 真宗学科 1年次生）
芦田 亮佑（法学部 法律学科 1年次生）	函師 菜々香（社会学部 現代福祉学科 1年次生）
中村 あや（社会学部 現代福祉学科 1年次生）	森川 鳳蘭（農学部 食料農業システム学科 1年次生）

■テーマ 「みんなで考えよう アフガニスタンの事
アフガニスタンをテーマに現地の状況と女性のエンパワメントについて考える」

■企画・引率 吉田 裕貴（ボランティア・NPO 活動センター ボランティアコーディネーター）

■協力者・団体 一般社団法人平和村ユナイテッド 小野山 氏/EJAAD JAPAN 筒井氏、ジェニファー氏

1. 目的

今回はオンラインの良さを活かしつつ、実際に国内で活動する団体の活動場所を訪れる事で日本においても実践できる国際協力について学ぶ事が出来るプログラムを企画します。

2021年8月、アフガニスタンでは状況の急変があり、日本でも社会的関心が高まりました。アフガニスタンの現状はどうか、メディアの情報だけを信じていいのか。実際に現地で活動している NGO からお話を聞く事でより関心を持ってもらう事を目的に企画しました。

当初、第二部はフィールドワークを予定していましたが、まん延防止等重点措置の発令に伴い、学内教室を利用し、感染症対策を徹底した上で対面形式にて開催しました。

2. プログラム内容

(1) 事前学習

アフガニスタンの現状や歴史、また今回ご登壇いただく団体の事について各自でまとめ、ワークシートを提出してもらいました。※第一部のみの参加者は除く

(2) 第一部『オンラインスタディツアー』（Zoom）

1月13日（木）18：00～20：00

協力団体：一般社団法人平和村ユナイテッド

小野山代表理事を ZOOM にお招きし、講演いただきました。写真や動画も交えながら政変前後のアフガニスタンの様子や団体の支援の状況についてお話ししてもらいました。グループディスカッションや質疑応答も含め、熱いメッセージを受け取りました。

(3) 第二部『フィールドワーク』（学内開催）

2月5日（土）13：30～16：00

協力団体：EJAAD JAPAN

学内に筒井・ジェニファー両共同代表をお招きし、団体の活動内容や女性のエンパワメントについて、アフガニスタン現地との中継を交えながら実施しました。また団体の活動を若い世代に広めていくためにどうすべきか、参加学生同士でディスカッションをしながら考えました。SNS の有効利用などの提言がなされました。



3. 参加学生からの報告

今井 杏

（経済学部 国際経済学科 4年次生）

本プログラムの1日目は、平和村ユナイテッドの小野山さんに話を伺った。アフガニスタンはよく「大国の墓場」と表現されるが、今アフガニスタンで繰り返される戦闘行為の多くは、国際社会が行ってきた武力介入に対する復讐であり、「正義のための戦い」なのである。そこで、平和村ユナイテッドは、アフガニスタン人に対する平和教育などを行うことにより、「力の信条からの脱却」や「非暴力で紛争のない平和をつくる」ことを目指している。

私は、小野山さんに「日本も戦争を経験している国。アフガニスタン人にとって日本人はどういうイメージなのか」と尋ねた。すると意外な回答がかえっ

てきた。「欧米とは違うというイメージがある一方で、日本も国際社会の一部だと否定的な見方をする人もいる。日本も戦争中は鬼畜米英というスローガンのもと総力戦状態で戦っていた。日本もアフガニスタンも同じだ。アフガニスタンを特別視してほしくない。」この言葉で私が当初感じていた「遠い世界で起きている異世界のこと」という認識の甘さは打ち砕かれた。

2日目は、刺繍を通じてアフガニスタン女性の自立支援を行う EJJAD の方々に話を伺った。アフガニスタンの女性は様々な制限により不安を抱えた生活を過ごしている。EJJAD は、そのような女性を一人でも救い、力づける活動を行っている。

両者の話には、共通点があった。それは、私達のような若者の力が大きいということである。アフガニスタンに住む若者の一部が SNS で戦争を止めるよう発信した結果、一時的に戦闘行為が止められたことがあったようだ。また、若い人と交流することで新たなアイデアが生まれるという EJJAD の方々の言葉にその影響力の大きさを感じた。

ただその力を発揮するには、国際社会の現状は私たちにも深く関係することであるという理解が必要である。国際社会で暮らす一人一人の慎重な判断の積み重ねが、アフガニスタンが有する数多くの困難を解決の方向へと導くだろう。そして同時に国際社会で起きている様々な課題を、自分ごととして考えられる正しい大人に私もなりたいと切実に思った。

森本 大輔

(経済学部 国際経済学科 4 年次生)

現在も大量の難民が発生している他、テロや麻薬の問題、そして食糧不足や自然災害による被災に見舞われている中で、講演というかたちでお話が聞けたことは貴重な体験であった。

まず、事前学習を踏まえて、印象に残っているキーワードは、「女子が学校に行けていない」、「インフラ問題」、「国境なき建築家集団」がある。しかし、筒井さんやアブドゥルさんは、「アフガニスタンを特別視しないで欲しい」や「タリバンとアフガニスタンは別であり、全部が全部、悪ではない」と示していた。これを通して、アフガニスタンの歴史や現状、そして、日本との交友関係について学びたいと考えることができた。

アフガニスタン刺繍をどのように普及させていくかについて、私たちの班では、『まずは知ってもらうこと』を念頭に議論した。議論の中では、刺繍を

メインとせず、どこか違う企業と連携し包装に使うなどのアイデアが出た。しかし、それでは、刺繍をしているアフガニスタンの女性に利益はあまり望めない。そこで、スターボックスが掲げている『あなたの一杯が復興支援に』を参考に、アフガニスタン刺繍を販売してはどうだろうか。そうすることで、アフガニスタンの現状や女性が強いられている状況を認知してもらえると同時に、寄付金も募ることができるとは思わないかと考える。

今後について、EJAAD が更新しているブログでは、『クラウドファンディングを始めました』や『識字教室を始めました』など女性支援プログラムを中心に積極的な取り組みが行われている。このような取り組みが行われていることを知り、多くの支援団体や活動について認知していきたいと考えている。加えて、アブドゥルさんの学生向けメッセージでもあったように、言語を習得したい。言語を習得することでより専門的な話もすることができからだ。実際に今回ジェニファーさんとお話しをする機会があったが、受け身になってしまった。この経験もあり、まずは英語の習得をしたい。

実際に現地に行くことはできなくても印象深いプログラムとなり、今後もこのようなボランティアには積極的に参加していきたい。

埜 風

(文学部 歴史学科 東洋史学専攻 3 年次生)

今回、自分はアフガニスタンについて他人事のように思っていたなと自覚しました。もちろんアフガニスタンの現状について何かできないかという気持ちがあってこのプログラムに参加しました。しかしこの問題はもっと真剣に考える必要があり、やろうと思えば出来ることはたくさんある事を知りました。危険な地域だから自分には出来ないということは無く、日本でも必死に活動している人がいることに気付きました。

とはいえ、平和村ユナイテッドの小野山さんにお聞きした内容には驚かされました。タリバンに占領された日について、予兆なく、一晩で事態が一変し、抵抗なく占領を受け入れた町もあり、それ程までにタリバンの力は強まっていたこと、それが圧倒的であったことをしきりに話されていました。

また、タリバン政権下において、国内で日常的に極刑が行われたり、旧政府関係者の惨殺や暴力が今も続いていること、貧困・飢餓の悲惨さを聞き、アフガニスタンの人々が依然として安心して過ごせて

いないことに強く危機感を覚えました。「力による統制はうまくいかなかった」「アフガニスタンは大国の墓場」「力ではない、対話による解決が必要」という理念が、実際にアフガニスタンの人々によって実践され、暴力の連鎖から子供たちを断ち切る活動が積極的に現地で行われていることを知り、私もその事実を友人と共有し、広げていくべきだと感じました。

一方 EJAAD の活動は、地域の方や学生を巻き込んだもので、とても興味深かったです。伝統工芸品を日本の支援の懸け橋にすることには、物質的な援助のつながりだけでなく、作った人の思いや存在の認識、文化や歴史が付与されていて、私達とアフガニスタンの人々との水平方向の関係づくりを可能にしたいと思います。支援者と被支援者ではなく、遠い場所に住む友人のような関係。現地の女性たちがいつか日本に来れるようになればいいなと思いました。

お話の中で印象的だったのは、現地で数人の女性の識字教育をされているという事です。ニュースでは女性の権利が侵害され、学校に行けない、仕事をさせてもらえないということしか知りませんでした。このような活動も一部では行われていることに希望を感じました。

プログラムの後半、グループワークで女性達をつくる刺繍作品をどの様に日本に広め、購入してもらうかというテーマについて意見を出し合いましたが、EJAAD の方々は積極的に若者のニーズや新しい商品づくりに取り組もうとされていて、学生の意見に真剣に耳を傾けていただきました。

「シンプルなデザインの刺繍作品」という意見には強く賛成します。EJAAD の存在を知ってもらうことこそ支援の輪を広げるために重要だと私は考えます。平和村ユナイテッドの活動についてもですが、継続してそれについて考えていくことこそ私がすべきことだと思いました。



堀井 涼花

(農学部 食料農業システム学科 2 年次生)

平和村ユナイテッドの小野山さんは「非暴力で平和をつくるのは幻想か?」というテーマでお話をしてくださった。アフガニスタンの急変の様子、その後、今後の課題を具体的に教えてくださり、小野山さんがこれまで出会った方のこと、平和村ユナイテッドの活動などを紹介してくださった。

特に印象に残ったのは、戦争遺児をサポートする様子についての動画である。戦争で父を亡くした子供は、父の復讐をするために、殺し合う可能性がある。そのような殺し合いが起らないように、平和教育をする。戦争のトラウマを癒し、楽しい時間を過ごすために、多くの子供たちが集まってゲームなど交流をしていた。そこにいる子供たちはとても良い笑顔だった。ただその中に女の子は一人もいなかった。アフガニスタンは女性が外出するのはとても危険な状況である。女の子たちも外で遊んだり、友達を作ったりしたいだろうと思った。性別が違うだけで、平和教育を受けられなかったり、外に出て遊ぶことができなかったり、経験できることが大きく違ってしまうのは不平等であると感じた。

EJAAD は刺繍をベースに魅力的な商品を作ることを目指している。タリバンの支配以来、男性家族が失職し、家族の生活を支えるため、刺繍による女性の収入は重要である。実際にアフガニスタンの女性が作った刺繍商品を見ると、大変丁寧に細かい刺繍が施してあった。

このような刺繍商品がどうやったら日本で売れるかのアイデアを考えて、学生同士で話し合いをした。さまざまなアイデアを出し合い、EJAAD の方に参考になったと言っただけで、自分たちが少しでも力になれた気がした。

この海外体験学習プログラムを通して、自分がこれまで知らなかったさまざまなことを知った。戦うことが正義だと思っている人がいること、笑わない子供がいること、家族のために一生懸命刺繍をする女性がたくさんいることなど、さまざまなことが印象に残った。平和を作るためや支援をするために活動されている平和村ユナイテッドと EJAAD のことを知り、少しずつでも良くなってほしいと強く思った。

これからも国際情勢や社会の問題に関心を持ち、世界にはどんな人がいて、どのような問題があって、どのようなアクションを起こすべきなのか考えたい。

野村 峻舜

(文学部 真宗学科 1年次生)

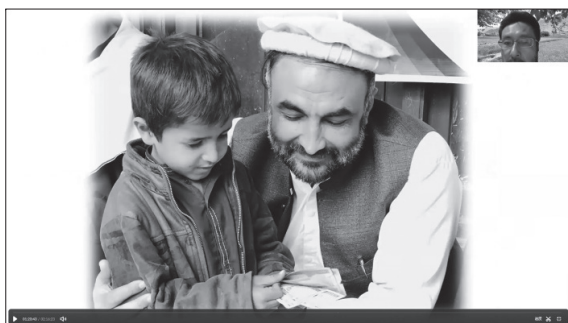
平和村ユナイテッドは、アフガニスタンで平和教育などの活動を行っている。アフガニスタンではタリバンによる政権掌握が起きて、政治的に不安定な状況だ。しかし、このような問題は突然始まったことではない。紛争が続くアフガニスタンでは、力や暴力で物事を解決するという構造ができています。そのため平和活動が咎められ、簡単に平和とは言えない状況がある。そんな中、平和村ユナイテッドは村の集会などで平和教育をして、非暴力での平和を目指している。集会では女性が集まって話し合うなど平和への活動が進んでいる。また、戦争遺児のサポートも行っている。

私は、人道支援は必要だが、平和への解決にはならないという言葉が印象に残っている。この言葉を聞いた時、平和村ユナイテッドの活動は、今だけの活動ではなく未来への活動であると感じたからだ。アフガニスタンの問題を考えるときには、長期的な視点を持って考えていくことが重要なのではないかと思った。

EJAAD は、アフガニスタンの女性を刺繍で支援している。アフガニスタンでは女性の権利が抑圧され、就労や教育の機会を得ることが難しく、外出することも危険な状態だ。EJAAD はアフガニスタンの女性が作った刺繍を販売することで、女性達の就労の機会を作っている。刺繍はアフガニスタンの伝統工芸の継承にもなっている。しかし、タリバンによる政権掌握の影響で刺繍が日本に届かないだけでなく、物価が上がり刺繍に使う材料の値段も上がっている。このような状況の中でも、アフガニスタンの女性は刺繍を続けている。

私は、刺繍がアフガニスタンの女性にとって仕事というだけでなく心の支えになっているのではないかと思った。女性の権利が抑圧されている中で、刺繍は女性に自信を持たせているのだと感じた。

今回のプログラムを通して、その国の文化や歴史



を知ることが重要だと改めて感じた。今後はEJAADの刺繍を購入してアフガニスタンの文化を知り、この活動を友人にも広めていきたいと考えた。また、ボランティア活動や支援活動をする時には、今だけでなく未来にどう繋げていくのかを考えていきたいと思った。

山本 蛭太

(文学部 真宗学科 1年次生)

この二部にわたるアフガニスタンのオンラインスタディツアーを通して、私は、紛争や権力集中の弊害は、子どもや女性といった社会的に弱い地位に位置づけられる人々が被りやすいこと、そしてそれらの人々を直接支援することの大切さを学んだ。

まず、平和村ユナイテッドの小野山さんのお話では、紛争遺児に対する支援について学んだ。ここで特に印象深かったのが、親の敵味方関係なく、紛争遺児になった子供たちと一緒に支援しておられるということだ。親の出自を聞くなどのタブーを犯してしまえば、簡単に支援計画が破綻してしまうことが考えられるが、あえて一緒に支援をすることで、子どもたちに垣根を越えた真の平和な心が育まれるように感じた。

次に、EJAADのお話では、アフガニスタンで権利を制限されやすい女性に対する支援について学んだ。私の、「タリバン政権についてどう思っているか?」という質問に対し、現地職員のアブドゥルさんがおっしゃった、「タリバンとアフガニスタンの人々を分けて考えてほしい」という言葉がとても印象的だった。日本にいと、受け身のスタンスで現地の情報を得てしまうため、どうしてもステレオタイプ化してしまう。自ら主体的に情報を集め、常に現地の情勢について客観的な視点を持つ重要性を改めて認識した。また、緊迫の情勢の中、このような踏み込んだ質問に対しても、アブドゥルさんは真摯に答えてくださり、とても貴重な経験をさせていただいた。

今回のプログラムを通して、アフガニスタンの子どもや女性に対し、草の根で支援をされている方々の貴重なお話を聴くことができた。それと同時に、自分と文化の違う国における女性や子どもたちが、具体的にどのような状況に置かれているのかということ、私はあまり知らなかったことに気づかされた。自らの環境に甘んじることなく、主体的に情報を得て更新し、そして学び続けるようにしていきたい。

芦田 亮佑**(法学部 法律学科 1年次生)**

私は、以前から国際問題に少し興味を持っており、2021年のタリバンによる政変についても連日のニュースなどで関心を持っていたため、今回の海外体験学習プログラムに参加した。

第1部は、平和ユナイテッドによる講演で、タリバンが政権を掌握した当時の状況から平和ユナイテッドを含めたNGO団体のタリバンとの関わりを理解しながら考えることができた。特に2つの話が印象に残った。

まず、タリバンがNGOと協力しているということ。タリバンが統治するうえで、他団体の存在は、邪魔なものだと思っていた。実際は、タリバンは市民活動を抑圧したいという考えは強くはなく、上手く統治するためにNGOを利用したいと考えている事に驚いた。

次にピースアクションという活動。これは、紛争を経験したなど様々な事情を抱えた人が主体的に自立していこうという活動であり、戦争のトラウマを抱えても良い方向へと進もうという姿勢に共感した。

第2部では、EJAADによる女性の自立支援の取り組みの講演で、実際に現地とオンラインで繋ぎ、アフガニスタンの状況を知る機会となった。自立支援の取り組みは、女性の刺繍作品を海外で販売する活動であったが、海外で販売し、女性が安定した生計を立てるのは難しいと感じた。現在アフガニスタンの流通は厳しく、また一つ一つ手作りのため海外の人が商品を手取るには、相当工夫が必要であるからだ。

アフガニスタンの状況やNGOの影響など初めて耳にする情報が多かった。アフガニスタンは困難な状況ではあることは間違いないが、タリバンの国内での影響や行動などニュースで報道されているものとは、少し違った部分もあった。これまで一方的にタリバンの行動は、全て悪だと決めつけていたが、本当にそうなのかを考え直す必要があると感じた。また問題の本質を理解するには、実際に経験した当事者に話を聞くことが大切だということも体験学習を通して学ぶことができた。

図師 菜々香**(社会学部 現代福祉学科 1年次生)**

今回私が学んだこととして、アフガニスタンは多民族、多言語国家であり、文化が豊かであること、

1979年のソ連侵攻から平和になっていないこと、たくさんの差別があること、女子学校が狙われるという事件があったがそれでも学びたいと強く願う女性がたくさんいることなどのたくさんのことが挙げられる。

そして、特に私は女性差別の問題が印象に残った。女性差別がひどいため、女性はほとんど家から出られず、保守的になってしまっているというお話を聞いた。家族を養うため、働きたいけどなかなか働けずお金を得られないという現状がある。

そこで、一つの家族を救いたいと活動できるボランティアの方々は本当にすごいなと強く感心し、私自身もっとアフガニスタンのことについて学んで、支援していける立場になりたいと感じた。

税関の関係で物は届かないかもしれないけれど、インターネットは繋がっていることを活かしてもっとアフガニスタンの貧困などを救いたいと感じた講演会でした。

**中村 あや****(社会学部 現代福祉学科 1年次生)**

新聞やニュースで見ると中東の国といえばまだ紛争が絶えず危険で近寄りがたい国々と印象をもつ人も多い。まだ人道支援が必要な国々という事実は、今もなお課題である。私自身、ただ危険な国だという思い込みがあった。しかし今回、平和を望む現地の人の取り組みを知り、その思い込みは間違いであると感じた。そして同じ地球に生まれて幸せを願う人間として共に平和を作り上げていきたいと思った。

今回はアフガニスタンと日本を繋ぐ支援とタリバン政権に伴う現状について話を伺った。タリバンが勢力拡大した2021年8月は町中に兵士が歩いているという恐怖に人々は不安にかられていた。子供や女性は家から出られない日が続く、強者の圧力に抵抗できない不平等さが嘆かわしいと思った。

日本での生活では味わうことのない生活の障害を

現地の人は感じている。銃声に怯えることや家族を失うことなど、それらが身近にあることが痛々しい事実である。わざわざ対立を暴力で解決することで何か良いことがあるか。話を伺った平和村ユニテッドの取り組みの1つに『現地の人たちが平和について考える機会を設ける』という活動がある。村の人たちが集まって自分たちの困りごとを対話によって解決しようと試みる。例えば子供は学校で行われる体罰についてその意義を話しあう。こうして人権を守る活動が非暴力の形で作られていく。

第二部ではEJAADの活動を伺った。主な活動内容として、刺繍づくりでアフガニスタンの女性を支援する団体である。刺繍づくりでどう支援するのか疑問に思ったが、それを売って得た収入が支援金となったり刺繍で皆が集まる憩いの場となり、制作自体が楽しく居られる居場所であったりする事を学んだ。

他の参加者とどうすればもっと売れるか、刺繍作りの案を考えた。ワンポイント柄やオンラインショップの展開といったアイデアが出た。今回のアイデアを参考にしてくれるだけでもほんの僅かだが国際協力に関われた気がして嬉しいと思った。

現地で活動する人の声を聴いて今までの町や教育が発展途上だという情報が本当であり、しかしよりよい未来に変えようと努力している人たちがいることが分かった。いま自分にできることは何か考えるきっかけになった。

森川 鳳蘭

(農学部 食料農業システム学科 1年次生)

第一部では、平和村ユニテッドの小野山さんから話を伺った。タリバンが政権を握ったことで、アフガニスタン人に限らず、現地にいる全ての女性の行動が制限された。戦闘が身近になり命の危険と隣り合わせ、支援団体の活動の継続が難しい状況、現地の方と連絡が困難、タリバンが設ける犯罪のラインが厳しくなり罪を犯すと公開処刑されるというむごい処置を受ける等の2000年代のアフガニスタンの情勢が戻ってきてしまった。

小野山さんが活動している団体では平和の実現を目指している。例えば、女性が執筆した本を読む、スポーツ(駅伝)、伝統闘技などである。現在は日常生活の支援と平和の教育をしている。

第二部では、EJAADのジェニファーさん、筒井さん、からお話を伺った。この団体は伝統的な刺繍作品を通してアフガニスタンの女性に学びと働きの

場を提供する活動をしている。伝統的な刺繍作品は主にアフガニスタンの女性が制作し、女性が手に職をつけ家族の生活を支え、自信を持つことを目的としている。アフガニスタンでは男女問わず、失業者が多いため、収入がなく、この収入が貴重である。

EJAADは国連との繋がりががないため、基本的には制限なく活動する事が可能になっているそう。ただ、タリバンが政権を握ったことで貿易の遮断が進み、外貨が使えず、現地は経済的に困窮している。

今回のプログラムで自分の知識や情報収集の浅さを実感した。また支援するにも思い通りに物事が進まないといった支援する側も様々な葛藤があることを聞くことができた。また、この体験学習がなければアフガニスタンの情勢の大変さも知ることができなかっただろう。



4. コーディネーター所感

夏の海外体験学習プログラムのアンケートではアフガニスタンについて学ぶ機会を作ってほしいという声が多く挙がりました。政変直後はメディアで報じられる機会は多かったものの、時が経つに連れてそれも少なくなっています。

今回は政変前から支援をしていたNGOのお話を聴いて、より自分事にアフガニスタンの状況について理解する事が出来たと思います。また、第二部では現地の方にも短時間ではありますが、オンラインで繋いでお話を伺う事ができました。実際に現地の方の声を聴けた事は多くの学生にとって貴重な経験であり、心に響いたのではないのでしょうか。

今回の経験が成長の一助になっている事を願います。

〈報告者：吉田 裕貴

(深草キャンパス コーディネーター)〉

○海外体験学習プログラム／ウクライナ【緊急企画】

事業名	IMAGINE ウクライナを知る・考える ～ Imagine all the people Sharing all the world ～
実施日	2022年3月31日（木） 13時30分～16時30分
実施形態	オンライン（Zoom ミーティング）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	ライブ参加40名（後日、オンデマンドにて配信）
協力団体	特定非営利活動法人 関西 NGO 協議会／京都市国際交流協会

1. 経緯・目的

2022年2月24日、ロシアによる全面的なウクライナ侵攻が勃発しました。龍谷大学では、この明白な国際法違反に対し、学長名の声明文の発出や、ウクライナへの人道支援募金といった取り組みも始めました。また、本学はキエフ大学と学生交換協定を締結しており、ウクライナやロシアからもこれまで交換留学生の受け入れや龍谷大学から派遣している実績があります。

この危機に対して、学生から「自分たちにできることは何もないのではないか」といった声が聞かれました。今こそ平和構築のために自分たちに何ができるのかについて考える機会とするため、以下のことを目指して、本企画を実施しました。

(1) ウクライナを知る

ウクライナの現在の状況だけでなく、文化や日本のかかわりなども含めて学び、より身近に感じ、自分事として考えてもらうきっかけにします。

(2) 市民社会の一員としての視点を持つ

人道支援を行っている NGO の人から、『人道支援の現場ではどのようなことが行われているのか？』について話を聴き、自分たちが出来ることを考えます。また、ウクライナをきっかけに、他の地域で起こっている紛争や難民問題についての興味関心を促します。

(3) 平和について考える

災害と違い、戦争は回避することができるので、平和を構築し維持するために必要なアクションや視点について考える機会にします。

2. 概要

次のとおり実施しました。

【講師・内容】

■第一部：アナスタシア コウバ氏

（日本在住のウクライナ人）

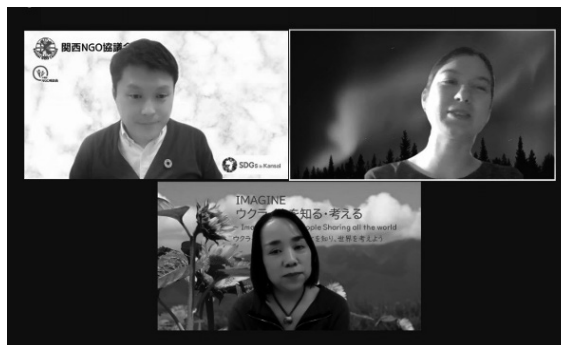
ウクライナ語や料理、伝統的な服装など祖国の文化や、侵攻前のウクライナの社会情勢、現在の状況

に対する気持ちを話していただきました。

参加者からはウクライナの言語や食べ物、過去のさまざまな出来事や現在の侵攻に関する事など、たくさんの質問がありました。来日した2年半前から本格的に日本語を学び始めたとは思えないくらいの、流ちょうな日本語を駆使しながら、多様な質問の一つ一つに丁寧に答えていただきました。

■第二部：栗田 佳典氏（特定非営利活動法人関西 NGO 協議会 事務局次長）

今回の侵攻で日本政府や NGO、大学などがどのような動きをしているのか、特に寄付に関しては視聴者参加型の質問を交えながら、募金をした次の一歩を考えることの大切さについてお話いただきました。加えて、世界中にはウクライナの他にも紛争が起こっている地域があること、難民や避難民がいることにも関心を向けて欲しいという話もしていただきました。



3. 参加者の声・得られた効果など

講演後の質疑応答では、SNSでの NO WAR アクション、今求められている支援やその変化、両国を均等に扱う情報についてなど、さまざまな質問があり、時にアナスタシアさんも参加しながら質問に答えていただきました。時間いっぱいまでたくさんの質問が出て、参加者の関心の高さが伺えました。アンケートでは以下のような声がありました。

・ウクライナの被害をニュースで見て、いつも辛いなど感じていました。今回参加して、支援の現状

やアナスタシアさんのお話も伺って、辛いと思うだけでなくいろいろ考えて自分で行動することの大事さを改めて実感しました。また、ロシア人の方に対する差別もあるとのこともあり、戦争自体が悪いことなのであって、ロシア国民が悪いのではないということや、被害に対する辛さから加害国を暴力で攻めてしまいそうになるけれど、暴力や武力は絶対にしてはいけないことで、そうではない解決方法を模索しないといけないということ強く感じました。

- ・アナスタシアさんから当事者のお立場で、ウクライナの方々はどう感じておられるのかなどをお聞きできたことは、特に貴重でした。栗田さんからお話もとても学びが多かったですし、他の地域で起こっている紛争や他の地域からの難民の日本の受け入れの問題にも目を向けるべきとのご意見はとても共感できました。
- ・栗田さんの「平和は願うものではなく、行動するもの」という言葉にも強く刺激を受けました。願うだけなら簡単だけど、行動しないと変えることはできないと考えます。自分にできること、小さな事からでもとにかく行動することを意識して過ごしていきたいなと考えました。

4. コーディネーター所感

この企画を実施するにあたっては、京都市国際交流協会と関西 NGO 協議会の皆様から多大の協力をいただき、実施することができました。この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

2月に勃発したロシアによるウクライナ侵攻を受けて、報道はウクライナ情勢のことばかりが報じ

られるようになり、アフガニスタンなど、それまで盛んに取り上げられていた他国の危機的な状況が報じられなくなりました。学生たちもこの侵攻に対し、「心を痛めているものの、自分たちにはできることは何もない」と考えている人が多く、何かアクションがみられるといったこともありませんでした。

無理にアクションを起こす必要はありませんが、「何もできない」と思い込んでいる状態に刺激を与えたい、そして、ウクライナ情勢の陰に隠れてしまった他国の状況にも興味関心を持ってほしい、戦争状態のウクライナだけではなく、ウクライナの文化などにも出会ってほしい、入学予定の学生にも届いてほしいなど、いろいろな想いを込めて、今回の事業を企画しました。

準備期間もあまりありませんでしたが、ウクライナからの留学生のアナスタシアさん（京都市国際交流協会からの紹介）から、自国の文化や現状への思いについてお話していただくことができました。彼女のお話を通じて、参加者にはウクライナを身近に感じてもらうことができたのではないかと考えています。また、関西 NGO 協議会の栗田さんのお話で、今回の紛争の陰に隠れてしまった他国の状況について考えることができ、自分たちにもできる具体的なアクションのヒントを得ることができたのではないかと考えています。

4月に入り、学生がアクションが起きました。こういうコーディネーションをこれからもコツコツと続けたいと思います。

〈報告者：竹田 純子

（深草キャンパスコーディネーター）〉

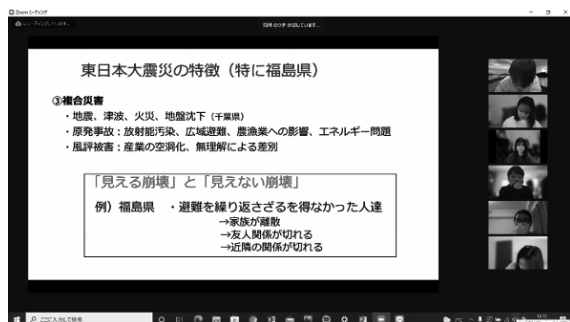
○国内体験学習プログラム／福島

事業名	2021年度国内体験学習プログラム 福島スタディツアー・オンラインプログラム
実施日	2022年2月7日(月) 14時00分～16時10分
実施形態	オンライン (Zoom ミーティング)
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	ライブ参加35名(後日、オンデマンドにて配信)
協力団体	株式会社小高ワーカーズベース

1. 経緯・目的

ボランティア・NPO 活動センターは、実際に福島に赴いて多様な立場の方々からお話を聴き、福島の今について学ぶ『福島スタディツアー』を2015年度から実施してきました。学びと気づきがとても多いツアーですが、ツアーの性格上、参加人数を制限する必要があります。そこで、何とかこの一端だけでも参加してもらえないかと、このツアーの事前学習会の一部をツアー参加者以外の方も広く参加できる『福島スタディツアー・オンラインプログラム』として実施することにしました。

2022年2月に予定していたスタディツアー自体は、このコロナ禍で実際に福島県に赴くのは困難で、2022年度に延期(延期日程は未定)となりました。このことから、2021年度はこのオンラインプログラムのみの実施となっています。



2. 概要

【講師・内容】

- ①「東日本大震災 ～福島状況について～」
筒井のり子 社会学部教授／ボランティア・NPO 活動センター センター長
東日本大震災により、福島がどのような被害を受けたのか、震災直後の様子などについてミニ・レクチャー。
- ②「(株)小高ワーカーズベースの挑戦」
和田 智行氏
(株)小高ワーカーズベース代表

福島県南相馬市小高区で「地域の100の課題から100のビジネスを創出する」をミッションに、地域の課題をビジネスチャンスととらえ、多角的な事業の展開・起業家誘致活動を行っている和田智行氏の講演。

3. 参加者の声・得られた効果など

- ・初めに、福島の震災当時からの情報を改めて学び、11年たった今でも帰還困難区域がこんなにも多く存在することに驚きました。コロナ流行に伴い、どうしてもコロナのことばかり考えていた最近ですが、東日本大震災のことを改めて振り返り、学ぶよい機会となりました。和田さんのお話は終始とても興味深く聞かせていただきました。私は2年前に現地で和田さんのお話を聞かせていただきましたが、コロナ禍を経験した今、改めて心に響くものがありました。和田さんがおっしゃっていた「予測不能な未来を楽しもう」という言葉に強く衝撃を受けました。コロナ以前も日本は予測不能な世の中だったと話されていましたが、私自身、コロナ禍の今、1ヶ月後の未来の状況も予測できないことに不安と諦めが強くなってしまいう時もありました。予定していたものは軒並みキャンセルか形を変えざるを得なくなり、沢山振り回されることに嫌になってしまうこともありましたが、和田さんのお話を聞いて、そんな予測不能だからこそ今を、未来を楽しまないといけないなと感じました。
- ・和田さんの言葉の中で、「多数決で多い方が正解とは限らない」という言葉がとても記憶に残りました。被災者の体験は、誰1人として同じではなくそれぞれの背景が違うからこそ、「こっちの方が正しい」とか「こっちの方が効率的(合理的)だ」などの言葉で、様々なアイデアを諦めてしまうのではなく、実現するために色々な方法を試してみるからこそ初めて課題の解決に繋がるのでは無いかと考えました。

4. コーディネーター所感

この福島スタディツアーは参加できる人数がそう多くないため、どうしても参加できない学生が出てしまうことを残念に感じていたこともあり、事前学習会をオンラインスタディツアーとして、学生を中心に教職員にも参加してもらおうスタイルに変更しました。参加者層が広がり、質疑応答の時間に厚みが出たように思います。また、このコロナ禍で目に見えないものを恐怖に感じ、様々な行動制限を経験したこともあり、福島の痛みがよりリアルに感じられたようです。「日常」が「当たり前ではない」ことを知り、「未来が予測不可能」であるということ

痛感したのではないかと思います。アンケートの記述が長文である割合が高く、どのアンケートも深く自省しながら書いていると感じられました。特に、「予測不能な未来を楽しもう」という和田代表の言葉が深く響いているようでした。

最近、メディア等でも震災のことがあまり取り上げられなくなってきたので、未だに福島県内に帰還困難区域があることを知らない学生などもいて、こうやって定期的に福島のことを考える機会を作る必要があると思いました。

〈報告者：竹田 純子

（深草キャンパスコーディネーター）〉

○国内体験学習プログラム／近江八幡

事業名	春季国内体験学習プログラム 近江八幡の左義長 ～コロナ禍における伝統文化の継承について考える～
実施日	オリエンテーション：2022年2月10日（木）10時00分～12時00分 フィールドワーク：2022年2月27日（日）9時00分～17時00分 2022年2月28日（月）9時45分～17時00分 事後学習会：2022年3月17日（木）10時00分～12時00分
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	10名
参加学生	岡 智浩（文学2）井上美咲（農学2）堀井涼花（農学2）美野田愛（農学2） 林 瑞生（文学1）木下絢斗（法学1）川口克基（社会1）法戸貴義（社会1） 瀧澤舞花（農学1）丸山汰一（農学1）

1. 経緯・目的

伝統文化の継承をはじめ、新型コロナウイルス感染症が地域に及ぼした影響やそれを受けての取り組みなどに焦点を当て、持続可能なまちづくりを考えることを目的としています。

2. 概要

(1) オリエンテーション (Zoom)

2月10日（木）10：00～12：00

- ・自己紹介
- ・参加する上での注意説明
- ・グループ打合せ
- ・感染症対策についての説明 など

(2) フィールドワーク

2月27日（日）9：00～17：00

午前：観光ボランティアガイドの案内によるまち歩き

午後：・グループにわかれて自由散策
・左義長保存会へのヒアリング

2月28日（月）9：45～17：00

午前：ミニ左義長製作体験
昼食：食堂ヤポネシアで地元食材中心の昼食
午後：・左義長製作現場の見学
・二日間の整理のためのワークショップ

(3) 事後学習会 (Zoom)

3月17日（木）10：00～12：00

オンラインホワイトボード Miro を活用して、ワールドカフェのスタイルでのワークショップを行いました。「未来の伝統文化」「私と伝統文化」というテーマに分かれ、フィールドワークを通して気づいたこと、考えたことなどの意見交換をしました。

(4) 左義長まつり（各自自由参加）

3月12日（土）および13日（日）

上記日程で行われた左義長まつりを、プログラムに参加した学生がそれぞれ自由に見学しました。

3. 用語解説

学生のレポートの中に出てくる祭りに関する用語の説明を以下に簡単に記します。

- ・左義長：松明（三角錐状の胴体と杉葉の頭、藁で編んだ耳などからなる）、ダシ、十二月（赤紙）の3つの部分を一本にし、前後に棒を通し、つり縄で括り固めたもの。神輿のように担ぐように作られる。
- ・ダシ：左義長の前方となる正面にくる作り物。むしと台からなる。現在はその年の干支にちなんだ物を主としてテーマを決めて制作される。素材は穀物や海産物等の乾燥した食物を使っている。
- ・むし：ダシの中の干支の作り物のこと。

4. 参加者の声・得られた効果など

岡 智浩

(文学部 歴史学科 文化遺産学専攻 2年次生)

各地域に受け継がれている伝統文化や文化財は保存していかなければならないとよく耳にする。だが、実際に保存し継承していくのは、当事者つまり地域の方々だ。地域住民がその地域にまつわる伝統文化に愛着が無ければ、保存する意欲が減少して廃れてしまう一方だ。だが、今回の近江八幡は人々に愛され、伝統文化である左義長祭りも子どもたちや地方に出向いた方々も参加されている。この二つのことを通じて私は、伝統文化を継承していく上で地域住民の繋げるといふ思いは非常に大切だということを学んだ。これは、一種の感情論で根拠のない考え方と思われても仕方がない。だが、伝統文化が今まで残された理由の中には、学術論拠では証明できない

人々の思いが含まれていることも事実だ。私自身、京都出身であり、生活の中に伝統的なモノが写り込むことは日常的であり当たり前のモノであった。だが、近江八幡の方々のようにこの街が好きだから守ろうという思いは無い。近所でも昔ながらの田んぼが埋め立てられ、新築物件が立ち始めていることから、地域全体としては景観を保護する考えはないように感じる。そのため、私が住む街の景観は変貌しつつある。これは、近江八幡のように歴史がないことも原因の一つだ。だが、全てを新しいものに変えるのは虚しさを感じる。これも温故知新を街全体で表現した近江八幡を見たからこそ感じたことだ。

近江八幡スタディツアーでは、伝統文化と地域の関係性の観点から様々な考え方を知ることができた。また、街並みから改めて古き日本の良さを認識させられた。伝統文化を未来の世代に繋げていくためには1人だけではなく地域全体の思いが重要であることを、近江八幡の街並み、そして市民の方々から学んだ。

井上 美咲

(農学部 食品栄養学科 2年次生)

近江八幡のスタディツアー、ありがとうございました。とても貴重な体験ができたと思います。左義長まつりについてのお話は、非常に濃いお話を聞かせていただきました。地域活性だけでなく、住民の生きがいにもつながるようなお祭りが県内にあるとは知りませんでした。伝統的な、住民のだれもが活気あふれることができるお祭りは、ぜひこれからも引き継いでいってほしいと感じました。

また、ボランティアガイドさんに案内していただいた近江八幡市内も非常に興味深いものでした。歴史を感じる立派な家からは、なぜか松が飛び出していました。この松は、「見越しの松」といい、江戸の末期から存在しているということ、その松の木から屋敷の中にいる番頭さんが外の情報を吸い上げて商売がうまくいくようにとの願掛けがあるということを教えていただきました。

二日目の昼食では赤こんにゃくをいただきました。小さなころに何度か食べていたものの、最近では食べていなかったのものでとても懐かしく思いました。大学生になると滋賀県外の人とのかかわりがかなり増えました。その誰もが、おそらく赤こんにゃくの存在を知らないのではないかと思います。ぜひ、もっと広げていきたい食べ物です。見た目はびっくりしますが、味にクセがあるわけではなく、万人受けす

ると思います。

また、街を歩いていると、たくさんの「とび太くん」がいました。近江八幡ならではの姿をしたものがたくさん見つかりました。飛び出し坊や巡りだけでも一日楽しめるのではないかと思います。実際に、街歩きの際に見つけるたびに写真を撮っていたのですが、調べてみるともっと存在していることがわかりました。後日、とび太君巡りに再チャレンジしたいです。



観光ボランティアガイドの案内でまち歩き

堀井 涼花

(農学部 食料農業システム学科 2年次生)

2日間のスタディツアーで、ボランティアガイドの方に近江八幡の資料館や街並みを紹介していただいたり、左義長の製作体験や製作現場の見学をしたりした。

宮内町の製作現場の見学をした際には、間近で作っている様子や出来上がった作品を見ることができた。ヤングコーンやキウイの皮などを使用するというさまざまな工夫、アイデアや、一つ一つの作品の細かさに感動した。作品のどこを見ても繊細に作られていることが分かり、技術の高さに圧倒された。見学したときにいらっしゃった地元の大学生は、いずれは自分もダシをデザインしたいと話しておられた。構成のアイデアを得るために美術作品を見に行くこともあるそうだ。この地域の人にとっては、左義長まつりはあることが当たり前である。だからこそ、コロナの影響で左義長まつりが開催できなかった時の喪失感はかなり大きなものであっただろうと想像した。

左義長まつりでは、長い期間やたくさんの人手をかけて作ったダシを最後は奉火する。燃やすので、形としては何も残らない。形に残らないものを伝統文化として受け継いでいくのは難しいのではないか

と思ったが、難しいどころか年々製作技術が上がってきているようで、素晴らしいと思った。コロナによる影響で左義長まつりを知らない世代が生まれ、その世代に知ってもらうためにお話会を実施するという取り組みも行っており、左義長まつりが大好きな人たちの、左義長まつりを大事にする強い思いがあるからこそ、この伝統文化は発展し、活気や迫力のある祭りが行えているのだろうと感じた。

私は左義長まつりが行われた日に見に行った。ダシが街を練り歩く様子やダシ同士がぶつかり合うけんか、最後の奉火を見た。楽しそうに、真剣に祭りに参加する地元の人がとても印象的だった。今回の近江八幡スタディツアーに参加したことで、実際に祭りをみて楽しむだけではなく、製作過程やその祭りへの人々の熱い思い、祭りによって生み出される幅広い人と人との繋がりなど多くのことを知るといふ祭りの味わい方ができた。

美野田 愛

(農学部 食料農業システム学科 2年次生)

近江八幡には昔の建物を使って街並みを残しつつ、現代特有の多様な食文化を取り入れたお店がたくさんあり、とても魅力的に感じた。建物は瓦が使われており、きれいな外観で、私が住んでいるところでは見ないづくりの建物の為、おしゃれに感じた。

また、近江八幡の伝統文化である左義長まつりは、毎年新しいダシをゼロから作っていることを知り、とても驚いた。ダシの制作現場を見学し、クオリティに驚いた。みんなで協力して長い時間をかけて完成に向けて作業していることが分かった。見学した宮内町の人から実際にお話を聞いて、祭りへの思いやコロナ禍での苦労をお聞きした。大変なことも多い中で、一生懸命されていることを知り、みんなが誇りを持って祭りに挑んでいることが分かった。さらに、実際にお話を聞き、事後学習をしたことで、私は伝統文化継承の必要性を学んだ。特に左義長は、町の人が集まって作業をするため、情報収集する一つの場であり、交流の場であることを知った。一度地元を離れても左義長まつりに参加するために毎年必ず地元に戻ってくる人がいたり、近江八幡以外の地域に住んでいる友達も一緒に祭りに参加するなど、左義長まつりは地元の人にとって大きな存在であり、誰もが参加できるお祭りであることが分かった。

当たり前だった左義長まつりが、コロナ禍で規模縮小での開催や左義長製作中止などになり、左義長

を知らない年代が出てきてしまうなど、当たり前ではなくなった。地域の人同士の交流の機会が減少し、ダシを作る技術が継承されないなど様々な問題が出てくるのではないかと思う。そうさせないために、地域の人は時代に合わせて活動の方法を変えてきた。祭りがあることで、町の活性化にもつながり、たくさんのメリットがあると思う。だからこそ、伝統文化は次世代に継承し、守っていく必要があると感じた。



左義長製作現場の制作

林 瑞生

(文学部 歴史学科 日本史学専攻 1年次生)

私は、「伝統」というと、伝統と言われるものが始まった当初から代々形を変えずにそのまま受け継がれていくものであるというように考えていた。例えば、女性の参加禁止や集落外部の人間の参加禁止などである。しかし、近江八幡の左義長まつりは女性が参加していたり、外部の人間の参加も認めていたり、左義長のダシ製作に新たな素材を利用したり、少子高齢化に対応したり、現代の技術の進歩を取り入れていた。また、新しいものを取り入れていくときや祭りの継承には若い世代の力が必要であるという事を学んだ。

宮内町のムシを作っておられた野村さんは、「親がムシを作る姿を見て家で真似して作っていて、あこがれていた」と言われていた。また、話を聞いた地元の大学生は、「小さいときに町の人たちが左義長を担いでいるのを見て早く持ちたいというあこがれがあった」という風に言っておられた。左義長まつりは子どもが成長したことを親やまちの大人が実感できる、また子ども自身が大人に近づいたと感じられる行事なのだと思う。また、幼いころから左義長まつりに関わることで、地域の人との交流ができ地域に対する愛着や愛情というものが芽生えるので

はないかと考えた。

近江八幡の左義長まつりのような祭りは、幼少期から他者と協力し同じ目標に向かって作業するという社会の勉強になるものであると感じた。そのため、学校では得ることのできない幅広い世代での共同作業という貴重な体験をすることができる素晴らしい行事だと考える。そのため、左義長まつりが今後も年々進化しながら行われていくために、私たちは左義長のことを知りそして、知らない人にこのような祭りがあるという事を広めていくことが私たちのできることの第一歩ではないかと考える。

木下 絢斗

(法学部 法律学科 1年次生)

今回の学習の中でボランティアガイドの方や左義長保存会の方々の話を聞き、伝統文化が存在し、それを継承していくことの大切さを再確認できたように思う。左義長保存会の方や左義長制作に関わっている方々が左義長まつりや近江八幡のことを熱く語っている姿を見て、左義長まつりや近江八幡のことが本当に好きなのだと感じ、大人になってからでも何か熱中できるものがあるということは素敵なことだと感じた。左義長まつりがあるおかげで、生涯を通して熱中できるものができて、目標ができて、思い出を作ることができて、地域全体が一つになり、地元に戻ってくる理由にもなる。自分たちの出身地を好きになり、誇ることができるようになる伝統的な文化があるということは非常に素敵なことであると思い、そのような祭りがある近江八幡のことが羨ましく感じた。

そもそも伝統文化に関心がない人がいたり、少子高齢化などの理由により伝統文化の継承が難しくなっている現状がある。左義長まつりの様にコロナ化の中でも心の拠り所となることができる伝統文化があるということは貴重で素晴らしいことであると気付いた。またこのような影響を与える力を持っている伝統文化を残していくことは大切なことであると感じた。

一日目のヒアリングで観光物産協会の方がおっしゃっていた「良い街とはホテルなどがある街のことを指すのではなく、残していきたいものがあり、それらを残そうとする情熱を持っている人たちが多くいる街のことである。」という言葉に、左義長まつりや近江八幡を良い街にしていこうという強い気持ちを感じ強く印象に残っている。またこの言葉を聞き、自分が自分の出身地の伝統文化や昔からある

ものについては、あまり詳しくないことに気付いた。それらを調べ、それらを残していくために自分には何ができるのかを考えていきたいと思う。

川口 克基

(社会学部 社会学科 1年次生)

近江八幡左義長まつりでは、13の奉納町がそれぞれ1基ずつダシを作成し、奉納している。ダシの作成には、多くの時間、多くの人手、多額の費用が必要になる。それらを支えているのは近江八幡に住む町民だ。それ故に、近江八幡左義長まつりは町中が一体となって開催される。祭りのために町民が連帯し、コミュニティを作り上げている。

ダシの作成にかかる時間は1～2か月、その準備を含めると半年近くかかる。これらをそれぞれの奉納町の町民が総出となって、協力しながら進めていく。この準備には、老若男女問わず、誰もが参加することができる。これは、誰もが何かしらできることがあるという意識が祭りの精神に含まれているからである。作業を進めていく中で、町民同士の交流が活発になる。自然に同じ町に住む人全員とご近所づきあいができるようになる。こうして、祭りによって町民全体に強い結びつきが生まれる。この結びつきは、出来上がったダシや祭りのクライマックスの奉火の際に感じることもできる。また、この結びつきは、災害時における安否確認を容易にするほか、孤独死の予防などのメリットがある。加えて、まちを出た若者が街に帰ってくるきっかけにもなっている。

この祭りはまるで文化祭のようである。奉納町が一つのクラスとして、それぞれのクラスが祭りを素晴らしいものにしようと、他のクラスよりも良い出し物を作ろうと切磋琢磨している。なによりも町民全員で祭りを楽しんでいるのが印象的だった。この祭りによって近江八幡のまちが活性化している。地域の活性化とはその土地に住む人々の活性化なのかもしれない。

法戸 貴義

(社会学部 社会学科 1年次生)

小さい時に見てきた祭りに触れて、祭りや地域の相性が抜群だと感じた。全国では祭りがコロナの影響で休止になるというニュースばかりを聞いて実際どんな気持ちで祭りに臨んでいたか気になっていた。でも実際に問いに答えてくださった方は祭りに対しての思いが強くとにかく開催させたいという信

念を持って頑張っておられることが伝わってきた。

左義長まつりの良いところは、常に新しいものや進化を求めているところだと思う。そのため、観光客はより祭りが新鮮に見え、楽しめる祭りだと思う。また派手な服を着ることが特徴の祭りでもあるため、新しいことやコスプレなどが好きな人にとっては、楽しむことができる。そして、観光客が訪れることによって地域の活性化ができる。また、ダシは、地域の方々が集まって制作している。制作場所はコミュニケーションの場となっており、地域の仲が深まる。それによって孤立を防ぐことや若者が地域に帰ってくるキッカケにもなる。また、災害が起きた時に安否確認など含めて効率よく進めることが可能だと考える。

左義長まつりに関わっている方々に話を聞かせてもらった。話してくださった方は、祭りに対する熱い気持ちを持っておられた。実際に左義長まつりの2日目を見て、コロナ感染対策をしながら町全体を盛り上げて活性化していると感じた。コロナ感染が収束した時には、より多くの観光客を入れて祭り全体にもっと活気があふれ、みんなが楽しんでいるところをもう一度見てみたい。

私は滋賀県に住んでいて、子どもの頃、初めて見た祭りが左義長まつりだった。左義長まつりの素晴らしいところをより多くの人に見てもらいたいため、SNSを活用して左義長まつりのことを発信することや他県に住む大学の友達を連れていくなどしていきたい。私はこれから、左義長まつりを次の世代へと繋げる活動をしていきたい。



左義長まつりの見どころの「ケンカ」

瀧澤 舞花

(農学部 資源生物科学科 1年次生)

今回のツアーを通して、「人の繋がり」について学んだ。他にも左義長まつりの歴史や近江八幡市の

取り組みについても学んだが、最終的には全てそこに繋がるのではないかと考えた。

左義長まつりは、人が集まって、話し合っただけで終わるものだと感じた。わたしは、この過程が文化祭や部活動などに似ていると思った。このような学校行事で今まで話す機会がなかった人と仲良くなれたり、意外な一面が見れたりする瞬間を経験したことがある。もちろん全てが思い通りに上手くいくわけではないが、その失敗も今思うと良い経験だったと言える。人の繋がりだけではなく、これから先何度味わえるかわからない団結力や大きな達成感を感じる機会をわたしはコロナで何度も奪われたのだ。わたしは祭りの二日間とも訪れたが、特に町内の人が声を出して左義長を担いでいる姿には心を動かされた。熱に帯びた空気や地元の大人たちが嬉しそうにしている姿を生に感じる事ができた。まるでわたしの奪われた時間が再現されたような気がした。そして見ているだけでなく、実際に担いでみたいと強く思った。

コロナで出来ないことはたくさんあるが、コロナだからこそ出来ることも同じくらいあると思う。人との繋がり大切さを感じることが出来たのもコロナのおかげだ。今一度、自分の他人に対する行動や言葉遣いを見直してみようと思った。

また今回のツアーはコロナ禍での観光地としての役割について興味を持ち参加したが、他にも伝統文化や歴史について学ぶことができた。普段は自分の興味があることしか調べようとしないので、新しいことを知り視点が広がったように感じた。また他学部や違うキャンパスの学生はもちろん、自分より倍以上の人生経験をされた方と左義長まつりという一つのテーマに関して真剣に話せたことはとても貴重な経験だと思う。

丸山 汰一

(農学部 資源生物科学科 1年次生)

私は近江八幡左義長まつりのスタディツアーを終えてまず始めに、「近江八幡には若い力が溢れている！」と感じました。ではなぜ近江八幡は若い人が集まるのか、その理由を自分なりに2つ考えてみました。

まず1つ目が、若者の興味をそそるものがたくさんあることです。例えば、クラブハリエやラコリーナといった全国的に有名な店はもちろんのこと、古い街並みの中に、カフェでスイーツを楽しむことができました。他にも、食べ赤いこんにゃくなどめず

らしいものもありました。近江八幡には魅力的な食べ物がたくさんあると実感しました。

2つ目は、近江八幡に住む方々が若い頃から左義長まつりに触れているということです。左義長まつりのダシ制作を見学させてもらったときに、「小さいときに見ていた大人たちに憧れて、ずっと祭りに参加している」という大学生の話を伺いました。左義長まつり当日、私は担がれたダシに圧倒されました。小さな子どもが大きなダシに乗り、笑っていたり泣いていたりと無表情だったり、いろいろな表情を見ることができました。そのダシに乗った子どもたちが、話をしてくれた大学生のように大人に憧れを持ち、将来、左義長まつりを担っていくのだろうなど思いながら見ていました。子どもの頃の経験が、一度街を出た人も祭りの時は帰ってきたり、若者が街にとどまったりする1つの理由になるのではないかと思います。

祭りは、年配の方が盛り上げるイメージだったのですが、近江八幡では若者が祭りを盛り上げていてそのイメージを覆されました。この数日間で近江八幡の様々な魅力を発見できたので、これからはさらに魅力を発見できるように近江八幡を訪れたいと思います。



左義長まつりの様子

5. コーディネーター所感

近江八幡で左義長まつりを取り上げたプログラムは3年目となりました。左義長まつりは、国指定無形民俗文化財であると同時に、地域の方々にとっては大切なコミュニケーションの場であり、楽しみにされているものです。今年は、左義長の制作においても感染症対策を徹底され、どうしたらできるかという発想で取り組んでこられました。そういった取り組みや祭りに対する熱い思いを多くの方からお話を伺うことができました。

伝統文化を継承するということは、変化をしていくことだということを、この左義長まつりを通じて学生と学ぶことができました。その時代に応じて形や方法を変え、今に繋がっているのは、祭を大切にされている地域住民の熱い思いがあるからこそであり、その思いが、若者、そして子どもたちへと伝えられています。学生は、その熱い思いを受け取り、今、自分たちに何ができるのかを考え、行動し、新しい社会を創ってほしいと思います。

〈報告者：國實 紗登美

(瀬田キャンパス コーディネーター)〉

事業名	春季体験学習プログラム報告会 ～知ることから始めるフィールドワーク～
実施日	2021年度 春季：2022年5月19日（木）12時40分～13時20分
実施形態	オンライン（Zoom）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	約50名

1. 経緯・目的

2021年度春季はコロナ禍の影響を受けましたが、宿泊を伴わないプログラムは対面で開催をすることができました。参加人数を減らして実施するなど感染症対策も講じて実施しました。

今回参加した学生がどのような事を学び、考え、今後の活動にどう活かしていくのかを発表する機会として報告会を行いました。

より多くの学生が参加出来るようにするため、平日の昼休みの時間にオンライン形式で開催しました。聴講者の参加のハードルを下げため、画面オフでの参加も可としました。

2. 概要

下記2プログラムに参加した学生が、それぞれの体験を通じ、学んだ事・考えた事を報告しました。プログラムに参加した学生以外に、プログラムに関心を持つ学生や、今回のスタディツアーに協力いただいた団体の方々にご参加いただきました。

また両プログラムの参加学生の事後レポートを1冊のレポート集にまとめ、HPにデータを添付しました。

報告プログラム

①春季海外体験学習プログラム

『みんなで考えようアフガニスタンの事』

②国内体験学習プログラム

『近江八幡の左義長祭～コロナ禍において伝統文化の継承について考える～』



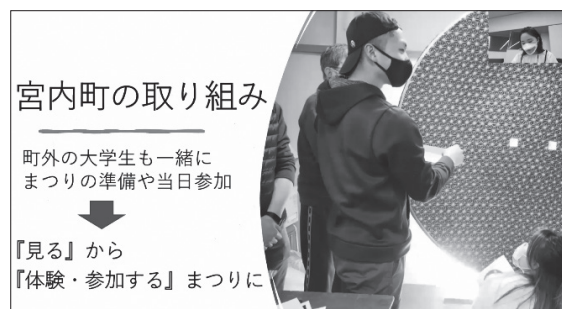
3. コーディネーター所感

急遽海外体験学習プログラムは、学内での開催となりましたが、やっと対面での体験学習プログラムが出来るようになり、学内での興味・関心も高かった様子で、想定していたよりも多くの学生・教職員が参加してくれました。

オンライン開催で、報告者以外は画面オフでの参加も認めたことで、参加のハードルが下がったのかなと思います。複数のキャンパスに所属する学生が1度に集まれるという点においてオンライン開催のメリットを改めて感じました。

しかしながらオンラインのため接続トラブルが発生したり、報告者の交代のタイミングで時間のロスが出るなど、予定より時間がかかってしまいました。当初から昼休みに2プログラムの報告会を実施するというタイトな時間編成だったため、次回以降は1日1プログラムにするなどの改善が必要かと感じました。

参加学生はプログラムで制作したものを全員で一斉に画面上に映すなどオンラインの特長を活かした発表でした。また報告会聴講者からの質問も数多くなされ、体験の場だけではなく、このような報告会の場の必要性を改めて感じました。



〈報告者：吉田 裕貴

（深草キャンパス コーディネーター）〉